FROM United Kingdom

中野香織

㉖メトロセクシーなイギリス男?

ヴェネチア、お疲れ様でした。敦子さんの映画祭レポートは、河北新報のウェブサイトで毎回読ませていただいてましたよ。

上映会場の脇に映画を見た人のコメントや感想が並ぶ掲示板があるそうですね。いいな、これ。見たあとすぐに他人の生な意見を聞いてみたくなる映画って時々ありますもん。最近ではカルロス・カレラの「アマロ神父の罪」がそう。メキシコ・アカデミー賞で主要部門を独占したそうですが、えっ!? こんなんで映画が終わっていいの!? といまだ悶々。ガエル・ガルシア・ベルナル君がやるピュアな美男の神父様が、いい人づらしながら卑劣きわまりない非道をやり逃げ、エリート街道ばく進。別に映画に勧善懲悪のモラルを求めるわけじゃないけど、残ってしまう〈これでいいのか〉感。

ジェームズ・マンゴールドの「アイデンティティー」も、見終わるなり他人の意見を聞いてみたくなりましたよ。ぐじょぐじょの雨の夜、連絡不通になったモーテルで、居合わせた人々が次々と殺され、死体が消えていく……というおどろおどろなスリラーではあるんですが、起承転結の「転」の部分で「シックス・センス」様式の「これまで見たものの意味ががらりと変わる」視点が提示されるんですよね。この視点がわたしにはなかなか面白くて、タイトルの味わいをあらためてかみしめつつ、その後さらに用意されたひとひねりある結末にも満足したんですが、斜め前に座った、見るからにホラーおたくな男性が、「転」以降ずっと、せせら笑ってるんですよ。いや、自分が面白いと思えば他人がどう見ようといいじゃないかってところもあるんだけど、ちょっとこれにはぐらついた。喜んだわたしはひょっとして甘っちょろい観客?

映画じゃないけどオーランド・ブルームを久々のイギリスの貴公子として褒め称えた風潮もどうなんでしょう? 弓ひきレゴラスや海賊の息子ウィル・ターナーの彼はたしかに素敵だけど、ブランドもん着てアクセサリーをつけ雑誌の表紙を飾るブルームって、ベッカムと見分けがつかないこともある。そういえばベッカム系の男って、最近イギリスでメトロセクシュアル・マン(ゲイではないのに都会的モードに敏感なヘテロの男)なんて呼ばれてちやほやされてるんですが、この状況じたいがどうもわたしが思い描く地理的概念におけるイギリス(勝手に描くな)からずれてるんですよね。偏見まみれの地理的概念を基準にすればベッカムもブルームもアメリカ西海岸系美男。イギリス的美男の系譜に入れるには抵抗があるんですが、もはや時代おくれな地理的概念のほうを修正すべき?

「アイデンティティー」 10月下旬よりニュー東宝シネマほか全国東宝洋画系にて

往復連載

齋藤敦子 / 中野香織

ドーバー越えて

服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来10数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。

カット・井上陽子

【お詫びと訂正】10月上旬号「ドーバー越えて」の著者表記に誤りがありました。正しくは齋藤敦子さんのご執筆です。
関係者並びに読者のみなさまにご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。